

(総評)

京の冬六年い組の古希の顔

あかぎ倦鳥

雅子

同窓会を素材にした句で、これほど上手く、しかもサラリと雰囲気の伝わってくる作品は珍しい。作者の日頃の鍛錬の結果であろう。その正体は何か。

措辞が全部体言で、具体的かつ判りやすいからである。修飾や説明がないので、読み手の胃の腑へストンと落ち、納得がゆく。

往年の名作「二十四の瞳」の写真が思い出されるが、下五の「古希の顔」が利いている。「六年い組」がまたセピア色の実感あり、何とも素晴らしい。

「そうだ、京都へ行こう！」はエトランジェの世界であるが。これは故郷の手ごたえ。

花八つ手姥捨山の天狗来よ

西風

先ず命令形の古格にのっとった、端正な句の形に感銘するのである。

八つ手の花は都会では庭木として見ることが多い。日陰でも日向でも従容として咲いてくれ、地味だが万人に愛される。長い柄のある大型の葉は、まさしく「天狗の団扇」と称されるゆえん。

西風氏のこの作品、天狗は天狗でも姥捨山の天狗を想定しているところが凄い。天狗は穏やかな小春日和に現われて誰かを姥捨て山に連れ帰る。独特のブラック・ユーモア。

古希の秋人には言えぬマダとモウ

豊嗣

巻頭も古希に関する作品であったが、言わずと知れた数え年の七十歳。本来古稀と書く。中国の詩人、杜甫の『曲江詩』に語源があるそうだが、

人生七十古来稀なり

何しろ紀元七百年ごろの話である。稀であったかもしれない。還暦や喜寿などよりはるかに古い履歴を有する語である。

「マダ」と「モウ」に下肝を抜かれた。アダムとイヴよろしく人の名かと。問われて未だと応える人、既にと答えるひとさままであるということ、破顔一笑というところ。

短日や妻の居ぬ間にわが身干す

清龍

冬至は過ぎたがこの頃の日がもっとも短い。その短い昼間、氏はわが身を干すのである、しかも細君の留守を狙って。謎だらけの一句であるが詮索無用。無心に口ずさめば良い。

化粧してもう食べ頃よと吊るし柿

黄雀

化粧して(白い粉を刷いて)食べ頃よとのたまうのは、散文的には吊るし柿である。俳句としては「と」で切れていると読めば、言っているのは家人か小鳥となるのが面白い。

口上に御祝儀はづむ熊手市

まさ

大熊手がひとつ売れるたびに「かつこめかつこめ」と囃し立てる酉の市。それから威勢の良い手拍子。「御祝儀も弾まねば。」庶民のささやかな熊手ではこういうことはない。

一病に百個浮かべて柚子湯かな

智昭

柚子湯の句にしては気宇壮大である。一病の回復を願いつつ百個の柚子を。これはたくさんさんの謂いであろう。一病が抽象的だが「腰痛」など身近な病のほうがより面白い。

消防のハシゴ車よりの雪の富士

しろう

氏としては珍重すべき一句である。この一句の主人公はまず氏とは思えない。出初式の消防士のことであろうか。三十メートルの梯子から眺める雪の富士はいかが？

(日)

寒桜刑受くる身に春來たり

冬草

「刑受くる身」なる措辞が心に沁みる。この場合「春」は出所以外にはなからう。出迎えた冬草氏がやさしくつきそう様が彷彿とする。見上げると二人を見守るように寒桜。

廢屋の朱の輝きや残り柿

弓人

互選の得点多かった佳句。惜しむらくは「廢屋」の一語。例えば「廢線」、「無人駅」などという語はイメージを強制し勝ち。(一例)ひと夜へて朱の輝きや残り柿

石路の咲きたる道を選び行く

慶子

色彩の乏しくなった冬の間、石路の真ツ黄色の花の可憐さには心和む。お使いの帰りか。行き先とか回り道とか具体的に。(一例)石路の道を選びて市役所へ

幼子やサンタへの手紙日本晴

和代

心楽しい一句である。幼稚園か保育園であろう。サンタへの手紙を書く。外は日本晴。「幼子」は不要だったかもしれない。(一例)サンタへの手紙書いてる日本晴

曾孫にと縫いし袖無し見つかれり

信貴

縫われたのは氏ご自身であろうか。隠れて縫ったのに見つかったのか。しばらく紛失していたのかすこし明らかにする必要がある。(一例)曾孫へ縫いし袖無し出てきたる

第九聴き落葉散り敷く道を行く

満紀子

数ある名曲の中で、第九の酩酊度はかなりのものだ。余熱を抱いて枯葉の道に戻る。ただ行くだけではなく感情を込める。(一例)第九聴きて落葉散り敷く道熱し

色とりどり形とりどり菊祭り

靖

秋晴れのの気持良い日には、大輪の菊がよく似合う。形も千差万別で楽しいが、さらに具体的に。(一例)菊祭り純白の菊はや疲れ

新米が友より送られ元氣増す

河童

われわれ日本人の銀シヤリ嗜好。コメを選んだ人々の古代国家以来のマジヨリテイ。まず友は不要。(一例)新米の送られてきて恙無し

年の瀬の悲しき便り今日もまた

晶子

落葉のように舞い込む喪中葉書。これが暮らしの一指標になっていることが切ない。悲しき便りははつきり「喪の葉書」とか。(一例)年の瀬や喪中葉書の今日もまた

寒月にそこまで送るどこまでも

善啓

氏は「送り」にどうやらこだわり癖があるようである。送っていつて送られて・・・。送りは、言葉としても動作としても面白いので、(一例)寒月を送って行って送られて

時雨来て降る寶石に車止む

藤則

しぐれだと思っていた。それが突然雹に豹変する気候。車を打つすさまじい音。宝石はすこし飛躍か。(一例)車打つ雹に変わりし時雨かな

鳥兜の森 兼題「咳」

清龍 選・評

***咳込む子の背さすりをれば夜の白む
孫の咳吾が身に代えて貰いたし

和代 (一)

しはぶける音遠慮がち閻魔堂

***咳こむも子規の鬪魂衰えず

遠慮がち小さく咳する季節がら

満紀子

早暁の静寂(しじま) 破りの咳ひとつ

われは咳犬はくしゃみを二度三度

空咳に眠け追い出す会議中

西風 (一)

日の本に近代詩歌や子規の咳

大ホール指揮棒振れば咳やみぬ

せき1つしつとかまえる車中かな

咳ひとつ出してあたりの様子見る

隣室の席治まりて夜深し

咳込んだ妻の背摩る肉あつし

咳込んでわが身の健康案じけり

咳ひとつ冷たき客の目われを凝視(み)る

藤則 (二)

***咳(しわぶ) くも妻と別床妻知らず

コンサート咳ひそやかに聞こえけり

喉をつく咳込み増して老いにけり

河童 (二)

信貴

(講評)

咳こむ子の背さすりをれば夜の白む

和代

同じ孫を持つ者として、実体験から来る、愛おしさ、切なさ、できることなら代わってやりたいという想いが伝わってきます。

咳きこむも子規の鬪魂衰えず

満紀子

咳こという季語からは、どうしても暗く、消極的なイメージの句が多くなる中この句は、今大河ドラマの時の人でもある子規を詠んだ前向きなところが良い。

咳(しわぶ) くも妻と別床妻知らず

豊嗣

内容は結構深刻なところを詠んでいます。我々の年になると、同床のカップルはおそらく少数はで、我が家と比べ、別床とはどんな状況なのかと種々想像してみても、案外楽しい句だと思いました。

(あとがき)

今年もいろんなことがありました。会員諸氏の創意と工夫、さらにご協力により、楽しく有意義な句会の数を重ねることができました。数え日を迎えるにあたりまして、改めてお礼申し上げます。

だんだんと秀句がそろってきて心強い限りですが、最後の「詰め」が甘くて損をしている作品が多々見られます。出来たと思っても「画龍点睛」を欠くことのないように。

「鳥兜」も御蔭さまで順調な軌道に乗ったよう。本場に良かったと思います。新規の企画につきまして、アイデアがありましたら、幹事団なり私あて、どんどんお寄せ下さい。

来る二〇一一年が輝かしい年となりますよう心よりお祈りいたします。倦鳥 (四)